
南桜高校野球部

屋下雨宿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

南桜高校野球部

【Nコード】

N6148Y

【作者名】

屋下雨宿

【あらすじ】

野球部モノのようなそうでないのような。

序、覚めない夢と惰性の続き

俺には幼馴染がいた。隣の家に住むお幼馴染。母親同士が同級生で仲が良かったこともあり、幼い頃からよく一緒に遊んでいた。遊んでいたというか、なんというか。いつも手を引かれているのは俺の方で、毎度毎度、無理やり連れて行かれるような感じだった。二人で探検に出て迷子になって、散々怒られた事もあった。つまらない悪戯で家の母を驚かせて骨折させた事もある。ちよつと行き過ぎた感じの子だった。

でも、嫌ではなかったし相手の事も嫌いではなかった。

しかし、そんな時間も長くは続かない。

別に不慮の事故があったとか、突然の引っ越しとか、そんな悲劇めいたものがあつた訳ではない。

年齢は向こうが一つ上で、性別も違ったから。それだけの事で、それが全てだった。

歳を重ねるにつれて、お互い同年同性の友達と遊ぶようになると、一緒にいる時間は減っていく。当然、俺達の距離も開いていった。ごく自然で当たり前の事だったと思う。

それでも、小学生の内は通学団が一緒だったので接点はあつた。毎朝あいさつする程度の関係だがまだ繋がりは残っていた。しかし、中学生になるとそれすらなくなってしまふ。ただ隣に住んでいるだけ。全く会話もない他人と言っても差し支えないような状態になっ

ていたのだった。

＊

四月のはじめ。今日は入学式。俺も気が付けば高校生になる。

「身長も顔つきも子どもの頃とは全然違う」

カメラで写真を取りながら、アルバムを見るという器用なスキルを駆使する母親が呟いてた。しかし、そんなこと言われても本人にはピンとこないものである。

時間の流れとは確実に残酷なものだ。人間の主観や客観でそれを正確にとらえる事は難しいと思う。

「凄く立派になった！よし、行ってこい！」

母親がバンバンと俺の背中を叩く。そうは言っても、俺が入った高校は地元の三流高校。凄くもなんともない高校。何もしなかった結果、なった高校生だ。全く立派だとは思っていない。

ようやく母親に解放された俺は、肩苦しそうにネクタイを直した。制服は中学で着慣れた学ランではなく灰色っぽいブレザー。その胸ポケット辺りに、鳥が羽を広げているような校章が縫いつけられている。

私立西桜高等学校。

俺が入学する高校の名だ。

その立地は最悪で、畑の真ん中にポツリと立てられている田舎臭い高校だ。周囲には、本当に何の建物もないので、すぐ目立つがそれ以上に物足りない。

まあ、その分だけグラウンドは広い。それでも、運動部が強いような話は聞いたことはないのだが。

入学式ということもあってか、正門では上級生や先生が新入生を迎え入れている姿が見える。その門の前では、パンプレットを配る業者のお姉さんがいた。これも何処にでもある光景だろう。

しかし、何かが足りない気がする。

俺は校内の駐輪場に自転車を止めて考え込んでいた。

ああ、そうだ。あの木が足りない。校内にも周辺にも桜の木が見当たらないのだ。学校名に『桜』なんて付いている訳だし、一本もないという事はないだろう。時計を見る。まだ時間もあるので探しに戻ってみようか。僕はUターンをしてきた道に戻る。

あった。

それは案外あっさり見つかった。正門を超えてすぐの左側。校舎側と言った方がいいのだろうか？芝を敷きつめ中庭のようになった場所のとなりにポツリと植樹されている。それも、たった一本だけ。俺と同じ今年の入学生だろう。桜の下にたむろして、写真を取り会っている学生の姿は少なくはない。しかし、一本の木に群がる新入生というのも惨めなものだ。

暇をつぶした結果、余計に虚しくなったし、この学校にもちよつとだけ失望した。

代わる代わる桜の下に滑り込む学生達を横目で見ながら、校舎へ向かう。その入り口、昇降口には「クラス編成」と大きく書かれた紙が張り出されている。これを確認してから中に入る訳だが、やはりここにも学生の群れ。その量は尋常ではなく、その集団の最後尾からでは自分の名前を探すのは困難だ。つまりこの中に割って入っていかなければならない訳だが、この人混みにもみくちゃにされる可能性を考えると気が滅入る。

仕方ないので、しばらく後ろで待つことにした。そこら辺にいる人の顔を遠巻きに覗いてみるが、知っている奴はいない。当然と言えば当然か。中学校の校区から南桜高校までは自転車で五十分ぐらの距離があり、もっと近くていい高校はいくらでもある。俺みたいに成績が悪くない限り、そちらを選ぶのが普通だろう。

それでも、見知った顔は全くない訳ではない。俺みたいな成績の悪い奴がいた筈だが、今のところは一人も見えていない。とりあえず、話し掛けてくるような仲のいい奴がいないので、こちらから探す気もないし、どうでもいい事なのだが。

人が減ってきたところに割り込んでいきクラスを確認。そしたら、さっさと中に入る。

ようやく校舎に入る事が出来た。人混みを抜けて一息つく。下駄箱は木製で所々欠けていたり、角がすり減って丸くなった。どうやらかなりの年季物のようだった。そこで学校指定のスリッパに履き替える。

廊下の床一面ワックス掛けでもしたのだろう、古く臭い校舎の中で廊下だけが無駄に輝いていた。そして教室へ。もう大半の生徒が席についていたので、俺も自分の席を探してさっさと座ることにした。

間もなくチャイムが鳴ると、担任が教室に入ってくる。

今のところ面白い事は何もない。今日一日はこんな感じだろう。いや、明日も明後日もそうかもしれない。大体、ここは何の目的もない中学の延長だ。名前が高校に変わっただけで惰性な事に変わらない。

今はまだ、そう思いながら肘を付いているだけだった。

2、隣人との強制的な再会方法

桜の季節も過ぎ去り、新しい学校、新しいクラス、それにもようやく馴染んできたと感じる四月の終わり頃。

それは突然訪れた。

基本的に何事にもやる気を出さないでいた俺は、当然ながら部活はせずに帰宅部を選択している。その日の終礼が終わると真っ先にクラスを出てとっとと帰る。これが日常だ。

自転車に跨り風の強い畑道を抜けると、やや新しめの一軒家が立ち並ぶ住宅地へ。その中央付近に埋もれている自宅へと真っ直ぐに向かって行く。分離帯や信号のある通りの道を離れ、自動車一台がやっと通れるぐらい細い道。その突き当りのT字路。ここを右に曲がれば家が見えてくるだろう。その角を曲がったところで、俺はある事に気付き自転車を止めて足を付いた。

誰がいる？

そう、自宅の前に誰かが立っていたのだ。

よく目を凝らしてみる。そこには、南桜の制服を着た見覚えのない女子の生徒が立っていた。何故か腕を組み仁王立ちをしている。何故、堂々と人の家の前に立っているのだろうか。同じ高校生という事で知り合いの可能性を考えてみるが思い当たる節はない。うーむ、不審だ。

どちら様でしょうか？などと声を掛けてみようかと考えたりもしたが、やっぱり思い止まる。

それは制服のリボンの色に気付いたからだ。南桜高校では、学年によってリボンの色が変わる。男子だとネクタイの色だ。一年が赤系、二年が黄色系、三年がオレンジ系の色である。自宅の前に立っている不審者のリボンは黄色。よって二年生だ。上級生ともなると益々接点はなくなる訳でして。

しかし、このまま通り過ぎる訳にもいかない。それでは、一生家に帰れなくなってしまう。その場で自転車に跨ったまま考え込んでいると、向こうがこちらに気付いて歩いてきた。その距離約五十センチ。手を真っ直ぐ前に伸ばしてもギリギリとどかないぐらいだろうか？そこからジロジロと見上げるように俺の顔を覗きこんでから一言。

「葛原 幸基？」

ああ。そうだ。それは間違いなく俺の名前だ。

俺は少女の問いに答える前に、目の前の少女をよく観察する。身長は俺より頭一個分低いぐらい、多分百六十センチ前後だろう。活発そうな真っ黒の黒髪ショートで、自信がありそうなやや釣りあがった目。体育系だろう足が長くスカートからのぞく太もももなかなか立派である。多分、校内でも魅力的で高レベルな部類だろう。だけど、この少女に見覚えはなかった。

「そうだけど。アンタは？」

特に言葉を選びもせず聞き返すと、何故かムスツとした表情をし

て更に詰め寄って来る。

「蓑島 有紀よ」

少女が発した名前。それは隣の家に住んでいる俺の幼馴染の名前だった。

言われてみればこんな感じだった気もする。口煩くて、キツイイメージ。小学校の時のイメージだが、今でもしつくりくる感じだ。改めて見返すと、素直にあまり変わってないなとも思えてくる。どうして、気付かなかったのだろうか？

「知らないとは言わせないからねっ！」

「思い出した。思い出したから」

俺が何も返さずに考え込んでいると、有紀の方からすごい剣幕で顔を突き出してきた。思わず両手を前に突き出して数歩分の距離を保ち自衛する。

「思い出した？つまり、忘れてたど？言われるまで気付かなかったと？」

俺の一言で更に機嫌を損ねてしまったようである。一步、二歩とどっしりとした足取りで更に歩み寄って来る。自転車に跨ったままの俺には逃げる手段はない。こういうときは早めに話題をすり替えるに限る。

「そ、それよりどうしたんだよ、こんなところに立って。何か用でもあるんじゃないのか？」

「そうだったわ。幸基に用があったの」

「へ、へえ……どんな用事だ？」

「勝負しなさい！今すぐ私と勝負しなさい！」

俺を指差しながらいきなり訳の分からない事を言い出した。当然、俺は眉をひそめて口元を歪め、今の気持ちを率直に表現していたが、その抗議が受け入れられる事はなかった。

＊

大きめのこたつ机を中央に置き、北西にソファを『く』の字に配置し、TVを南東に据えた洋室の居間。俺達、俺と有紀はそこでテレビを見ていた。

有紀が俺の家に来るのは何年振りだろうか？小学校の頃は結構頻繁だった気がするが、いつが最後だったのかはハッキリと憶えていないし、思い出せない。特別仲が良かった訳でもないし、覚えていないのが普通だろうか。

「あらあら、久しぶりねー。元気にしてた？有紀ちゃん」

「冬子さん、お邪魔してます」

冬子とは俺の母親の名前だ。

母が挨拶しながらお茶を出す。それに合わせて有紀は頭を下げた。母は今もよく有紀の家、蓑島家で喋っていることが多いので、有紀とも頻繁に会っているらしい。

有紀が家に来る事も実は珍しくなかったりするのだろうか？

「まだ、家のユキと遊んでくれてるなんて知らなかったわ。こいつ

は何も教えてくれないし」

「今日はたまたまです」

たまたま？人の首根っこを捕まえて無理やり入って来た人間の言う台詞とは思えない。

『激熱奮迅！ベースボールナイター！』

TVから掛け声とともに一際大きな音楽が流れ始める。CMが終わり始まった番組は野球中継だった。

「きたきたあああああっ！さーて、始めるわよ！」

アナウンサーの熱い実況など余裕でかき消す有紀の音量。突然、耳元で声を上げられると頭痛がするような感じがして、俺は上半身だけ大げさに逃がした。もう一つ言いたいのが、番組が始まったぐらいで盛大にガッツポーズするのはやめてほしい。

「始めるって、何を？」

「勝負よ！」

「だから何のさ？」

「何対何でどっちが勝つか賭けるの。それで近かった方が勝ち。点数よりも勝敗優先ね」

「わかったよ」

早口で一回言われたただだったが、何をするのか？そのルールは何なのか？案外、スルっと飲みこむ事が出来た。

「懐かしいわねえ。私も参加しようかしら」

母もそれに割り込んでくる。色々あったが、母は有紀の事が大好きだ。事ある毎に「うちの子にしたわあ」などと言っている。

「いいですよ」

「懐かしいって？」

「あら、忘れたの？昔はお父さんとユキと有紀ちゃんをよくやっていたじゃない」

「ふーん」

そんなことを言われても全く思い出せなかったが、とりあえず相槌だけ入れておく。

試合は地元のア球団と関西のB球団の試合。野球のルールぐらいは知っているが、野球中継なんてロクに見ていないのでどちらが強いのか皆目見当もつかなかった。

思い付きの適当で数字を紙に書く。紙に書く理由は、後でいい分を変えない為の証拠としてだ。

「決めた？」

「うん」

「私も決めたわ」

準備が出来たところで、掛け声に合わせて一斉に公開。

幸基	3	1
有紀	0	7
母	1	0

ちなみに、左側が地元A球団である。

有紀は内容を確認しながら自信あり気な笑みを浮かべて紙を回収していった。

＊

「まだゼロゼロか」

ソファーに寝転がってマンガ雑誌のページを捲っていた俺は、雑誌の脇からTVを見てつぶやいた。TVのボリュウムを俺が下げたしまった為に、すっかり意識しないと部屋の隅、俺のいるソファーまで聞こえてこない。

有紀と母はTVの前に座ってTVを見ながら何を話している。どうやら、俺の存在など完全に忘れているようだ。

「エース対決だし仕方ないね」

こっちを向いて母が答える。一応、聞こえていたらしい。

「ふーん、俺でもこれよりマシ思うけどな」

画面の向こうで、タイミングを完全に外されたスイングで無様な三振をする打者を見てからつぶやいた。そんな俺の親父臭いトークに有紀も加わってくる。

「幸基はまだ野球やってるの？」

「小学生までだけど」

「それじゃ無理ね」

「やってた！そういえば、やってわね！」

子どもの昔話には異様な喰いつきを見せるの母親の性だろうか？
俺からしてみれば嫌な予感しかないし、出来ればそこは軽くと流
しいてほしいものなのだ。

「確かこのアルバムにたくさん……」

いつ、どこから取り出したのか？カーペットの下にでも隠してあ
ったのか？気が付きた時には、母の右手にアルバムが握られていた。
誰が見ても新手的マジックだと、驚きの声を上げるだろう。

「そんなもの持ってくるな！」

慌ててソファから飛び出して、アルバムを開く前にそれを取り
上げる。

「えゝ」

四十超えた女が口を尖らせも、誰も可愛いとか言わないと思うぞ。

「片付けてくるからな！」

「有紀ちゃんも見たいって言ってるし、一緒に見ようよー」

「え？私はどっちでも……」

などという会話には聞く耳を持たずに、アルバムを持って書斎へ
向かう。

書斎の扉を開けたらアルバムのネームテープを確認。『幸基八巻』
と書かれている。アルバムを順番になるように戻すと、並べられた
アルバムを前に溜め息を付いた。

俺のアルバムは現在全部で十二巻。集めれば円卓でも囲えてしまう数字になっていた。更に、家は3人兄弟で合計すると三十冊ものアルバムが並べられている。本棚二列分を占拠しているのだ。母の写真好きには困ったものである。

しかしこれだけあると、家族兄弟の写真だけでなく、友達と写っている写真も多い。枚数を数えた事はないが、有紀の写真もたくさんあったはずだ。

「馬鹿馬鹿しい」

仕舞ったばかりアルバムをもう一度取り出そうとするが、結局、辞めて部屋を出た。

「で、母さん。今日の飯は？」

「えーとねえ。冷蔵庫にハンバーグがあるから、焼いて食べてもいいよ」

「うーい」

俺は居間に戻って来てもソファに居着かず、またすぐに部屋を出た。

別に腹が減っていたとか、ご飯が食べたかった訳ではない。有紀がいるからだろうか？居間にいると何だか落ち着かなかったのだ。だから、離れて漫画を読んだりもしたし、今も逃げ出すように部屋を出て行く。

それで、俺は何をやっているのだろうか？

そんなものは見ての通りである。俺はキッチンでキャベツ、人参、ピーマン、ウィンナーなどをフライパンで炒めていた。所謂、夕食

の準備と言う奴だ。母親にやれと言われた訳でもないし、普段からやっている訳でもない。

塩コショウと醤油、それにオイスターソースを少しだけ。シンプルな味付けである。

もういいかと思い火を止める。それを一先ず大皿へ移すと、冷蔵庫からハンバーグを取り出して焼く。白飯の準備は母が済ませていたみたいなので、これで完成でいいだろう。

水切り付きの食器用プラケースを持って居間へ戻る。それから、料理や炊飯器を運んだ。

「ご飯出来たよー！」

母親が叫ぶと間もなく弟と妹が居間に駆け込んできく。「お、ハンバーグじゃん。母さん分かってるねえ」「私、魚が食べたいって言ったんだけど」などなど晩飯の内容に感想を述べながら席に着く。母はそれを軽く受け流しながら、皿に取り分けていく。

てか、誰も有紀には突っ込まないんだな。ちゃっかり、茶碗まで受け取ってるし。しかもそれ俺の茶碗なんですけど。

手際良く準備を済ませて、こたつ机の一人ずつ座る。机は正方形で角は4つ。ここにいるのは、俺、有紀、母、弟、妹の五人。一人座れない訳で、俺がソファアの上に溢れていた。いや、まずはそれよりも……

「なあ、俺の食器がないんだけど」

「棚にお父さんのがあるから持って来なさい」

「はいはい」

「ちょ、ちょっと待って！これが、もしかしてこの茶碗……」

立ち上がる俺を有紀が引っ張った。もう片方の手に握られているのは、先程も言ったように俺の茶碗だ。

「俺のだけど」

「か、返すわ！って言うか、私、家でご飯食べないといけないし！そろそろ帰らないと怒られるし！」

有紀は何を思ったのか顔を伏せて茶碗をぐいぐいと押しつけてくる。中身が入ってるんだから、そんなことしたら危ないだろうに。

「じゃあね！」

俺が茶碗を受け取ると、有紀は一目散に部屋から出て行ってしまふのだった。

母はニヤニヤとした表情で何故か無駄に幸せそうだった。妹は「ばいばーい」と手を振っていた。弟は我関せずと言った感じでご飯を食べ始めていた。

＊

翌日。学校が終わり家に帰ると、何故かそこにいた。

何がかって？そんな事は言わなくてもわかるだろう。有紀である。

「おかえり」

「……ただいま」

「何よ？今の間は。私が居たらいけないって言うの？」

「別にそう言う訳じゃないけど」

居間のソファアのどつかりと座りこんでいる有紀に対して、全く文句がない訳じゃないが、言っても面倒な事になるだけな気がする。そこでここは黙っておく。

「昨日賭けの事では話があるんだって」

奥からお菓子の袋を抱えて母が出てきた。それを机に広げると「どれがいい？」などという感じで有紀に選ぶに促していた。それに応えるように有紀は四袋ぐらい摘まみ取る。

おいおい。自分で言うのも何だが、人様の家だぞ？一袋にしとけよ。つーかそれ、俺の買ってきた奴なんですから。

「あ？ユキも食べる？」

「いらね。それより話って何だよ？」

「そうそう、昨日の賭け私が勝ったでしょ？だから私の言う事一つ聞いてもらうからね」

「は？」

そう言えば、野球ってどうなったんだっけ？最後まで見てないというか中継が終わったので……。いや、それよりも「言う事を聞く」とか小学生の約束かよと言いつてやりたいのだが。

「は？じゃないわよ。昔からそうだったでしょ？」

「文句なんか言わずに、女の子のお願いの一つぐらい聞いてあげなさいよ。そんなことだからいつまで経っても彼女が出来ないのよ」

母も打ち合わせでもしてあったかのように有紀の味方をする。

「分かったから、言ってみろよ」

ここで文句を言っても形成が悪くなるだけである事を理解し、半場諦めた様に言い放つ。

それ聞いた有紀は満足気にソファから立ち上がると俺の前に立つ、そして蛍光灯目掛けて指を一本付き立てた。

「甲子園目指すわよ！」

甲子園？昨日までの展開から察するに野球の事だろうか。顔をしかめる俺の隣で「あらいいわね」となど言いながら手を叩く母親の姿はわざとらしい。

「まあ、いいけどさ。野球部ぐらい……」

「え？」

目を丸くして、鳩が豆鉄砲を喰らったかのように目を丸くして驚いた顔をしている。それでも、微かに売るんだその瞳は真っ直ぐに俺の方を見つめていた。

何でそんなに驚くんだよ？　と思っていたら母まで同じような顔をしていた。お前らは俺がどんな反応すると思っていたんだよ？

俺はまだその意味を知らなかった。いや――

3、野球部なんて、なかった

放課後。

校舎を出るためには必ず通過しなければならない下駄箱。俺はそこで有紀に捕まった。クラスの中では一番に出てきたはずだし、まだ一日の終わりと告げるチャイムもなっていない。どうして待ち伏せなどできるのだろうか？……まあ、それだけゆるい高校だと言うことだろう。

「逃げる気だったでしょ？」

お見通しだと言わんばかりに鼻を鳴らす。

しかし逃げるも何もないだろう？野球部云々の約束はしたけど、今日会う約束何てしてないのだから。

「それじゃあ、行くわよ」

なんて考えはしたものの特に反論する事もないまま、有紀に引き摺られるように部活棟へ向かうことになった。

校舎を出たら正門とは逆の方向へ。校内の一番奥にあるプレハブの二階建て。そこが部活棟だ。先を歩く有紀は一階一番奥の扉まで行くとその扉に鍵を挿す。しかしその扉には、部活名の書かれた看板が掛けられていなかった。隣は『陸上部』。その向こうは『テニス部』と言った感じの一目でわかる看板が扉に取り付けられていたが、ここにはそれがなかったのだ。

これは、どういうことだろうか？

何か怪しい感じがするなあ……なんて思考を巡らせていると、俺は決定的な事実を思い出してしまう。

そう。あれは、新入生歓迎会の話だ――

体育館に集まり舞台の上上がった先輩達の興味のない話を聞かされた後の事。続けて部活動の紹介・勧誘が行われた時だった。同じように舞台の上に各部活の代表が二、三人ずつ出てきて、活動内容とかどんな人に来てほしいとかそんな感じの有触れた勧誘活動をこなしていく。俺はあまり聞いていなかったが、それが終わった後に隣の奴が「野球部ないんだな」なんて話し掛けてきた事があったのだ。その後、配られた部活一覧のパンフレットにも、野球部はなかった。それについても一言二言話をしたはずなので間違いはないだろう。

結局、俺の辿り着いた結論はこれだった。

この高校に野球部なんてないんじゃないのか？

鍵を開けて中に入って行こうとする有紀に、少し遠回しに疑問を投げ掛けてみる事にする。

「部員いるの？この部活」

「いるじゃない。ここに」

つまり、私がそうです。と言いたいのだろう。これでは何もわからない。ちょっと遠回しが過ぎたか？仕方ないので続けて別の質問をする。

「ピッチャーってどんな奴なの？」

「あー。その内来るでしょ」

やはりハッキリとした応えはかえってこない。更に続けて部員の人数を聞いたが、それまでばやかされてしまった。そうこうしている間に、俺の思考は段々おかしいな方向へ暴走をはじめていた。

（おいおい。これはもしかして、有紀一人だけの怪しいサークルとか言うんじゃないだろうな？ 宗教とか占いとかUFOとかそんなものは勘弁だぞ？ いや待てよ。母もグルだったよな？ これは旅行部とか言い出しかねない。これはありえる。しかし、そうだったら約束が違うじゃねえか。ここはビシツといってやるべきだろう。うん。俺は悪くない。悪いのはお前らだ）

そんな思考の果てに俺は覚悟を決めて口を開いた。

「もしかして、もしかしてだな……」

「うん？」

「野球部なんてないんじゃないのか？」

「だからあるって」

「しかも、お前以外に部員いないんだろ！？」

「ん？」

「いないんだろ！ やっぱおかしいと思ってたんだ！ 新生歓迎会の時も、部活棟のネームプレート見ても、野球部なんて名前はなかったじゃないか！」

「あー、それはだね……」

有紀はトーンを下げて片手を上げて小さく手を振っていた。俺に落ち付けとでも言いたいのだろうか？ だが、ここで引く訳にはいか

ない。

「俺は昨日から気付いていたぞ！野球部がない事を知っていてこの話を承諾したんだからな！本当の目的は何だ？やはり母もグルだったのか？はやく言え！さもなくば……ぶへっ！」

渾身の左ストレートが顔面に直撃する。説明しよう。有紀は左利きだ。右にしろ、左にしろ居たい事には変わりはないのだが。わりと本気で殴られたみたいで、鼻時でも出そうな位に痛い。しかも、話の途中だったから舌も噛んだし余計に痛い。

「落ち着いて、後ろを向け！」

有紀の指の動きにつられて口元を押さえながら振り返る。そこには、眼鏡を掛けた男子学生の顔が目の前にあった。

「うわっ！」

その学生はぴったりくっつくぐらいの真後ろにいたので、俺は驚いて飛び跳ねるように離れる。自分でも何で気付かなかったんだろうかと言いたくなるぐらいだ。それだけ、自分の思考に没頭していたのだろうか？そうは思いたくないが……

改めてその学生を見る。ブレザーの上からでも分かるぐらい体格の良くない感じ。それに、黄色のネクタイは二年の証。有紀の同級生だろう。

「こんにちは。今日は早いね」

「部長もはやいですね。この馬鹿がうるさくてごめんなさい。これでも一応。新入部員なんですけど……ほら」

有紀に押し出されるような形になり、軽く会釈を交えながら俺も挨拶をする。

「こんにちは」

部長と言うからには野球部の部長なのだろうか？どうやら、これは部員も部活も存在していたということだろうか？

「よろしく。新入部員くん」

笑顔で握手を要求されたのでそれに応じる。悪い人ではなさそうだけど、野球部と言う感じの手ではなかったし、運動部と言う感じの体格にも見えなかったのがちよつとだけ不安だった。

＊

明かりもつけていない薄暗い部室。窓は小さく射し込む明かりは限られている。広さは二十畳以上あるのだろうか？意外と広いその部屋はまだ何も飾られていない真っ白な姿をさらしていた。

つまり、机や椅子、ロッカーなど部室にありそうな用具もここには存在しない。

唯一置かれている物と言えば、片隅に纏められた野球の道具だけ。こちらは、ボールからキャッチャーのプロテクターまで一通り揃っていた。

この一式を見て俺はようやくここが野球部だと認めた。慣れない問い掛けから答えを引っ張り出すより、こうやって中を確認した方

がはやかったのかもちょっとだけ後悔もする。

それから、ボールを手の中で転がしたり雑談をしたりしながら待つ事二十分。ようやく部員が集まったようで、部長が号令を掛ける。その後すぐに自己紹介が始まった。

もう一度、部室を見渡す。部室にいるメンバーは五人。

まずは部長の掛け谷 充。二年。眼鏡を掛けないと何も見えないほど目が悪いらしいが、普段はあまり眼鏡を掛けていないという変わり物。インドア系で読書が趣味らしい。野球経験はほとんどなく、運動神経もあまりよくないらしい。

青山 小助。二年。何と言うか顔にもルックスにも特徴がない。いや、この際は目立った欠点がないというべきか？部長と違い、中学まで野球をやっていたのでそれなりの経験者だという事だ。

石江 七種。一年。昨日入部届けを出して、実質今日からの参加らしい。何と言ったらいいいのか、鼻が凄い。とにかく凄い。頂点から平らに潰された鼻だが、何故か鼻の穴が捲れ上がっていて、鼻の穴が丸見えになり豚の鼻のようになっている。初見は思わず吹き出してしまった。

悪い事をしたとは思っている。許してくれ。

彼は野球部で地元ではそこそこの名知れた選手だったらしい。それが何故、こんな高校に入ってきたのかは疑問であるが。あまり深く考えても仕方ないだろう。

それに、俺と有紀を含めた計五人だ。

他にも部員が三人いるらしいが、今日は来ていないという事だ。半分幽霊のようなものらしく、ほとんど姿を見せないという話だ。

った。

「ちょっと待てよ」

「何か質問でもあるのかい？何でも聞いてくれよ」

「五人でどうやって野球をするんだ？幽霊含めても八人しかいないじゃないか」

「甘いわね。私はマネージャーで参加できないから実質7人よ」

有紀が得意気に訂正を入れるが、全然威張れた事ではない。むしろ、非常に忌々しき事態だろうに。

「蓑島は『部活部活』って言ったかもしれないけど、実はまだ同好会なんだよ。野球同好会」

「はあ」

それから、先輩達から野球部の現状について説明をもらった。

先輩の話をまとめると、部活として承認してもらうためには最低十人の部員と顧問の先生が必要だという事。去年から幽霊含めたメンバーで同好会として、活動しているという事。それまでは他の部活より圧倒的に優先順位が低い為、絶対にグラウンドでの練習は出来ないという事。だから、現在は部員集めを積極的に行っているという事。一応部員の目途は立っているらしいという事。最後に部長は掛ヶ谷先輩がやっているが、実質的には有紀が一番の権力者だという事。本人は否定していたが、有紀の性格を考えるとまず間違いはないだろう。

これぐらいだろうか……？

そうそう。ついでに言っておくと、元が女子校なのでこれまで野

球部があつたような話はないらしい。とは言つても、共学になつてもうすぐ二十年。男女比も校舎内にもそれらしい名残りは残っていないのだが。

「まだ四月だし今はうまくいなくても、これから新入生も増えると思うよ。きつとね」

という部長の言葉は曖昧な憶測を重ねており、如何にも自信がない姿が窺える。

「折角二人も入部してくれた事だし、たまには練習しようか？」

たまには？そんな言葉を聞くとほとんど練習していないのか？と尋ねたくなるが、これ以上野暮ったい事は気にしないことにした。

とりあえず、「甲子園目指すわよ！」なんて冗談でしか言えない状態である事は理解できたので良しとしようか。

4、 気に入らないのは

練習をするという事で、俺達はジャージに着替えて部活棟を出た。

一目見ればわかるが、グラウンドは満員御礼だ。中央を使っているのはサッカー部。その奥に女子のハンドボール部の姿が見えて、更に奥の専用コートにテニス部がいる。そして、脇の方のスペースには陸上部が陣取っていた。とても俺達が使えそうなスペースがあるようには見えない。

しかし、先輩達はそんな運動場の光景には目もくれなかった。行く場所は決まっているらしいのでただ黙って付いて行く。グラウンドとは全く違う方向へ向かうかと思えば、校門を出て……

「え？ちよつと！何処行くんスか？」

石江が動揺して声を上げた。こいつが言わなかったら俺が同じ反応をしただろう。それもそのはず、二年生達は学校を出て道路を跨ぐとすぐその畑に入って行ったのだ。誰ん家かも分からない畑に入ってはいけない事ぐらい、小学生でも知っている。

その上、『土足で畑に侵入した生徒がいる』と言う話で無駄な全校集会が開かれた直後の事なので、こういう行動には余計に敏感になるものだ。

「ああ。大丈夫だから、早く来なって」

ぶっきらぼうに手招きをする有紀。お前がその言い方すると、力

ずくでもみ消すように聞こえて余計に不安になるんだが。

「ここは家の畑だから気にしないでいいよ。今は使ってもいいしね。全校集会の件なら関係ないし」

青森先輩にそう言われると、俺達一年もようやく納得して畑に足を踏み入れるていく。

「穏当に大丈夫なんスカねー」

などと石江がいつまでもぶちぶち言っていたが、いざとなれば二年生に責任を押し付けてしまえばいいだろう。

今は使われていないのか畑の土は思ったよりも硬い。

先輩達が道具を出している間に、有紀が拾ってきた木の枝で畑にダイヤモンドを描くとグラウンドの完成らしい。とは言っても所詮は畑。そこまでの広さはない訳で、ダイヤモンドを書くだけで精いっぱいの広さ。外野のスペースなんて全く確保できていなかった。

「こんな狭い場所は何するんですか？」

柵もなければネットもない。こんなところでボールを飛ばしまくったら周りの畑の迷惑になることぐらい考えなくても分かる。

「主に軽めのノックかな？」

「いいッスねー」

「やる気あるねー。じゃあ、石江くんからやろうか」

「了解ッス！」

石江はグラブを手にとると、守備位置まで駆け出していく。

先程からバットを軽く素振りしているのは有紀。ホームベースの後ろ、審判の立つ位置ぐらいの場所でミットを叩いているのが青森先輩。そして、ショートの手備位置に石江がついた。

「よしっと」

有紀がバッターボックスに入り、ボールケースを取りやすい場所に置く。

「ちょっと、気になったんすけど、ノッカーは蓑島先輩ッスか？」
「そうよ。何処からボールが飛んでくると思ってるのよ？」

石江が不満そうな顔を見せると、有紀も同じような顔して返す。

「いや……まあ、何でもないッス」

「それじゃあ、いくわよ！」

石江が構えもしない内に有紀がさっさと仕掛ける。初っ端から正面の強い弾丸ライナー。おいおい。新入部員相手にそれはないだろう。相変わらず自分勝手な事をする奴だ。

だが、石江も負けていなかった。反応良くそれを止めると、素早く返球。ついでに得意気な顔もセットで。

「いいグラブさばきしてるなあ」

返されたボールをキャッチして青森先輩が感嘆の声を漏らす。流石は経験者といったところか。

「へえ、中々やるじゃない……」

それには有紀も納得しているようだ。……と思ったが、眉をひそめていてその顔は険しい。そして、なんだか目がマジになっている気がするのだが。

「次！」

打球の速度が上がる。素人目に見ても違いが分かる程の速さだ。それでも石江は素早くて確にボールを処理しては青森先輩に送っていく。

「次！」

石江が守備位置に戻るとすぐに次の球を打つ。

「次！次ッ！次ィ！まだまだあ！」

何か段々速度が上がってませんか？石江は淡々と同様の動作を繰り返しているが、その顔からは汗が溢れだし顎から地面に零れ落ちていくのがここからでも見えた。

「ちょっと、有紀ちゃん！いきなり飛ばし過ぎだよ！」

青森先輩が制止を掛けると、ムスツとした表情で睨み返してノックを続けていく。何を怒っているんだ。こいつは。

「二人ともすごいなあ……」

俺の隣にいる部長は止めようとする様子もなく、満足そうにノックの様子を眺めていた。しかし、部長の言うとおり二人とも凄い。やはり俺が昔やっていた少年野球とは別次元の動きだったし、俺に

真似しろと言っても無理だと思う。

それから淡々とノックをこなしていく。それから数分もしない内に、ケースに突っ込まれた有紀の手が止まった。どうやら、ボールがなくなっただけらしい。

「ふん。まあいいわ……今日はこの辺で勘弁してあげる」

有紀はバットを肩に担ぎあげると、青森先輩とホームベースの間に大量に転がっているボールを拾ってケースに戻していく。これでノックは終わりのようだ。

「ありがとうございます！」

石江は帽子を取って一礼するとこちらに戻ってきた。その額からは何時間の練習した後のように汗が滴り落ちている。

「あー。僕、汗っかきなんスよね」

俺の視線に気付いた石江がそんな言い訳をしたが、明らかに有紀のオーバーパースが原因だと思うのだが。

「有紀はいつもこんな感じなんですか？」

「うーん。いつもはもっと大人しいんだけどね。本気になると歯止めが効かなくなるっていうか、何て言うか」

「そうなんですか」

「でも、普通に練習しててここまでなる事は滅多になかったと思うんだけどなあ」

部長も苦笑いをしていた。

「次！葛原！」

やっぱり俺もやるんだよなあ。まあ、小学校頃は結構やってた訳だし今でも人並みぐらいには動けるだろう。後ろに抜けるような打球は畑の迷惑だしやらないと言っていたし。

それでも、ノツカー。有紀の顔を見るとちよつとだけ不安だ。

「じゃあ、いくわよ」

有紀がボールを掴み取って、放り投げる。それから、バットを両手で持ち、振り抜……. かなかった。ボテボテとした勢いのないボールが俺の前に転がって来る。それを拾い上げて、青森先輩に投げた。

「素手で拾うな！ グラブを使え！」

「よし、わかったわ！じゃあ、本気で行くわよ！」

今度は俺の右横をすごい速さでボールが抜けて行く。不意と付かれたとはいえ、目で追うのが精いっぱい。速さでグラブを出すことすらかなわなかった。

と言ってる間に次の球が飛んでくる。危ない！マジで危ない！殺す気か！

「無理じゃない！もう一度！」

今度もさっきと同じ、いや更に速い球。必死にグラブを伸ばすがやはり届かない。もう少し加減出来んのかコイツは！

「早く戻る！」

「だから無理だって！もっと取れる玉にしてくれよ！」

「やり過ぎだよ！」

「またボールがなくなるよ！」

これには流石の部長も止めに入る。

横からも援護が入ると、有紀の動きもようやく止まった。ようやく俺も一息ついて胸を撫で下ろした。

「しょうがないわね。さっきの一年ならこのぐらい取れたのに」

独り言を呟いているのか、わざと聞こえるように言っているのかは分からないが先程からやたらと不機嫌な事だけは間違いなさそうだ。

「それじゃあ行くわよ」

さっきまでの熱血ぶりとは打って違って一気にトーンダウン。

ちょこんとバットに当てただけの玉が有紀の足元からゆっくりと縫い目がはつきり見える位の遅さで転がっていく。

「え？」

「ダッシュ！」

左手で招き入れるような合図をしながら声を張り上げる。

「ああ、そういう……」

「ダッシュ！」

うるせーな！聞こえてるよ！

「遅い！もう一本！」

ボールを拾ってファーストへ投げる。そこから守備位置に戻る前に有紀は声を荒げて、次の球を打っていた。

そして、嫌がらせのようにボールは有紀の足元を転がっている。どう見ても、ピッチャーかキャッチャーの取る球だろ……

「またかよ！」

文句をたれつつ前へ突っ込む。ボールを拾って、青森先輩にトスをした。

「遅い！もう一本！」

また同じような球が有紀の足元をテンテンとしていた。

取れないような打球を連続した後はこの連続である。そりゃあ、こういう処理の練習もあるんだけど、最初から連続してやることじゃないだろう？ 新入部員に対してのシゴキのつもりか？ 何様だよ？

「遅い遅い！まだまだ！」

それに、先の石江があれだけビシバシと厳しいノックをした後で、前進しなけりゃならないような弱い打球ばかりを続けられたら、まるで俺が下手糞みたいじゃないか？俺にだってプライドぐらいあるのに。もうちょいマシなやり方があるだろ？

「もう一球！」

徐々に火の付きはじめた有紀とは裏腹に、段々とイライラを募らせていく。

「もっと走る！」

「やってられるか！」

更にもう一回足元に転がるボールと広いにいるだけのノック。そこで俺はグラブを地面に叩きつけてやる。

「ちょっと！」

「俺は帰るからな！」

他の部員も俺を止めようとするが振り払って学校に戻ると、さっさと着替えて帰路に着いた。

家に帰った俺を待っていたものは後悔。いや、帰り道の途中から気付いていた。

冷静になって考えてみると、怒る程の事ではなかったと思う。これじゃあ、俺の方が気の短い餓鬼みたいじゃないか。

それから、自分の部屋の窓から隣の家を見て、謝りに行こうかなんて考えたりもした。ずっと考えていた。

それでも、隣の家。有紀の家から明かりが消えるまで、ただ眺めていただけだった。

5、肉まん転嫁

あまり眠れないまま夜は明ける。休む理由もないので渋々と家を出て登校した。どうせ有紀にも謝らないといけないし、休む気何て最初からなかったがこればかりは気分の問題だ。

昨晚考えた結果、学校で有紀に謝る事にした訳だが、肝心な時と方法はまだ決めていない。家に尋ねるのは流石に気が引ける。俺が最後に行ってから何年経つかもわからないぐらいだし、向こうも家以上に兄弟が多いうえにあまり面識のない人もいる。誰が出てくるか分からない以上、選択肢に入れる事は難しいだろう。同じ理由で、朝に待ち伏せするのも良くない。

それ以外で有紀に会えそうな場所と言ったら、結局、学校ぐらいしか思い浮かばなかった。方法は……行き当たりばったりでも何とかなるだろ。

学校が近付く。寝不足からか久しぶりに運動をした疲れからか、朝の喧騒が頭に響いて痛かった。あまり気分もすぐれない。足早に教室に入ると席に着くなり机に力なく突っ伏した。

授業開始まで時間はある。少し寝ようか。

「おはようッス。葛原くん」

と思ったところで名前を呼ばれた気がして顔を上げる。そこには、昨日見た特徴的な鼻があった。名前は確か……

「あれ？石江？」

「何を不思議そうな顔をしてるんスカ？」

「何でこんなところにいるんだよ？」

「何を言ってるんスカ？僕達、同じクラススよ」

「あれ？そうだっけ？」

こんな特徴的な顔……と言うか鼻をしている奴が同じクラスにいる事に、今まで気付かなかったとは。俺もそろそろ眼鏡の着用を検討するべきか。別に目は悪くないけど。寝る前の止まり掛けた思考回路でそんな事を思っていると向こうから話を切り出して来た。

「昨日の事で野球部の先輩が話をしたいから、昼と一緒に食べないかって言ってたんでスけど……」

「先輩って蓑島か？」

「違うッス。掛ヶ谷部長」

俺の警戒心が表に出てしまったのか、石江はそれを慌てて否定する。

「まあ、いいけど。怒られたりするのには面倒だな……」

「そういう話じゃないらしいッスよ。大丈夫。僕も一緒に行くから」

「わかったよ。昼だな」

「よかったッス！ありがとう！」

机に伏せたままになっていた俺の手を両手で掴むとブンブン振り回した。こんなことされると眠れない。俺は寝たいんだからその辺を察してほしいなあ。なんていう俺の期待をあっさり裏切って石江は話を続ける。

「ところで蓑島先輩と知り合いなんスカ？」

「どうして？」

「二人とも呼び捨てだったじゃないッスか」

確かに俺は有紀と呼ぶし、有紀は俺の事を幸基と呼んでいる。多分、昨日も意識せずにそう呼んでいたのだろう。見た目とは違ってしっかりと見てるんだなコイツ。

「それで、昨日あれから大変だったんスよね」

「荒れたのか？」

「荒れたって言うか真っ暗って感じでしたッス」

「真っ暗？」

有紀が真っ暗って言うのは、俺も見たことない気がするし、イメージも出来なかった。

「幸基の奴ゝ幸基の奴がゝ幸基がゝ……って感じッスね」

そのガラガラの声色が似てるかどうかは知らないが、恨めしそうで呪い殺しにでもきそうなB級ホラーな感じは伝わってきた。

「そんな奴には、あんまり会いたくないな」

「そうッスね」

自分の話を終えて満足したのか、石江がそれ以上突っ込んだ事を聞いて来る事はなかった。そうこうしている内に、一睡もできないまま授業が始まってしまうのだが。

どうせ、授業が始まったらほとんど寝てるから関係ないか。

*

昼休み。

我先にと群がる生徒達によって購買は異様な熱気に包まれている。全く暑苦しいたらっありゃしない。そんな購買を出てから少し離れた場所。木陰に置かれた静かなベンチで掛ヶ谷部長は俺達を待っていた。

もちろん、そこに有紀は来ていない。

石江はいないと何度も繰り返しているが、そこは入念にチェックを入れるべきだろう。正直言って、掛ヶ谷部長よりも有紀に話があるのだから。

軽く挨拶をしてから、部長は話を始める。それは特になんてこともない話だった。

簡潔にまとめると、部員が集まる目途は立っているという話。有紀が厳しすぎて部員が辞めてしまった例もあるので、有紀にはキツく言っておくという話。それから、ただ入部してくれるだけでいいと入部届けを渡されておしまい。それだけだった。

そして、チャイムが鳴って授業がはじまり。終わる。やがて放課後。俺は帰路に付く生徒達を眺めながら、石江とともに部室に顔を出す。

扉を開けて挨拶をしながら中に入ると、そこには掛ヶ谷部長、青森先輩それに有紀。二年の先輩が三人揃っていた。

有紀がこちらに気付いて口を開くと、当然のように俺に文句を言ってくる。

「何？また来たの？」

「いたら悪いのか？」

部長は「キツく言っておく」などと言ってはいたが、大方予想通りの反応だ。こんな風な対応されたら誰だって辞めたくなるだろうに。

「まあまあ、やめなよ」

部長が間に割って入ったと思うと、そのまま有紀を外に連れ出して行ってしまう。インドア派で一番大人しそうな部長がここまでするとは思わなかった。一応、部長やってるだけの事はあるとでもいうのだろうか？

「本人も虐めたくてやってる訳じゃないと思うんだけどね。部長が説教するらしいから、今は任せておこうよ」

二人が出て行った後で、青森先輩が苦笑いをしながらフォローを入れる。それから俺達は部活の準備をはじめた。準備といっても着替えだけ。活動内容もストレッチとグラウンドの周りを走っただけだった。

日も沈みかけ、空の色も鮮やかさを失いはじめる。そろそろ上がるのかという頃になって、ようやく有紀と部長が戻って来た。そして、有紀と話す事もなくそのまま解散になるのだった。

＊

いつもと同じ畑の真ん中を突っ切るだけの帰り道。とは言っても、

もう日も落ちており辺りは暗い。ついでに足もいつもより重たかった。部活の後なんてこんなものだろう。

自転車の明かりを付ける発電機の音だけがよく響く。帰宅部の中にはあまり聞くことのなかった音だ。

「何でついて来るのよ!」

と、前方から怒ったような声がする。俺の目の前には有紀とその自転車。

先程、こちらから横並び話しかけようとしたら、横から蹴飛ばされそうになったので大人しく後ろを走っていた。結局、有紀の機嫌がよくなるなんて事はない。

「仕方ないだろ。家が隣なんだからさ」

先を行く有紀がしきりにこちらの様子を気にしているが、同じ部活で同じ時間に解散して同じ方角を目指して帰れば、こうなる事は考えなくてもわかるだろうに。

そんなに嫌だったら、速度をあげて振り切ったり、一旦止まって先に行かせたり……

ガシャン……ッ

俯き加減で聞こえない程度で声で呟いていると、俺の自転車の前輪と有紀の自転車のキックスタンドがぶつかったようだ。

「あぶねーな!」

「危ないのはそっちでしょ! 信号、赤じゃない!」

顔を上げると確かに赤信号が見えた。ブツブツ言っている間に畑

道を抜けていたらしい。

「ああ、ホントだ」

「何が『ああ』よ！全く、危ないったらありゃしない……」

有紀は視線を前方に固定したまま文句を言ってきた。何処となく歯切れが悪い。

やがて信号が変わると、今度はこちらを向いて、

「私はコンビニ寄ってくから、付いてこないでよね！」

怒ったりするのかと思ったら、どうでもいい報告をしてきやがった。いや待てよ。もしかしたら、コンビニなら人も少ないし落ち着いて話ができるかもしれない。後を追って、信号の先にあるコンビニに自転車を止める。

有紀はこちらを人睨みした後、何も言わずに自動ドアを潜っていく。俺も黙って中へ入る。有紀と話す前に、まずはレジで一仕込み。

「肉まん二つ」

安直かもしれないが、食べ物で機嫌取るのは定番出し間違いではないだろう。

会計を済ませたら有紀のいる雑誌コーナーへ。

「なあ、ちょっといいか？」

「何よ？」

週べのページをパラパラと捲りながらではあるが、一応返事はあった。

「ほい」

肉まんを一つ差し出したが、やはり受け取ってもらえずにそっぽ向かれてしまう。もちろんそれ位の事は想定済みだし、これで諦めるつもりはない。

「俺だって野球やりたいんだから」

「本当に？」

雑誌を棚に戻す。案外あっさり喰い付いてきた。部長が説教したところで、そこまで効果があったとは考えにくいし部長のおかげとは思わないが、今は感謝しておこう。

「本当に野球がやりたいの？」

「もちろん。昔からやってきた事だしな」

有紀が俺の顔を覗きこむ。俺も真っ直ぐ有紀を見て返した。

少しの沈黙。こういう時間は相手がなんであろうと緊張するしドキドキする。目を合わせる事の魔力というかなんというか。

「わかったわ。一つだけ約束して」

有紀の方が先に視線を外すと、俺の手から肉まんを奪っていく。今、それを取る事に何の意味があるのか？

「練習はサボらない事」

「ああ」

指を付き立ててみせる有紀をもう一度真っ直ぐ見返して頷いた。

「2つ」

あれ？1つじゃなかったのかよ……何て突っ込みたくもなるが、有紀は真面目な顔をしている。今はやめておいた方がいいだろう。

「夢を絶対に諦めない事」

「は？夢って？」

「え？……甲子園よっ！甲子園！」

一瞬、間があったように感じたのは気のせいだろうか？

「いい！？絶対行くわよ！甲子園！」

「分かったから、コンビニでそんなに騒ぐなよ……」

幸い他に客はいなかったが、レジの店員はこちらをガン見している。俺の一言でそれに気付いた有紀の顔が爆発でもするかのようになり、一気に真っ赤になるのが見えた。

「幸基のせいで恥かいたわ」

一気にトーンダウン。俯き加減のその姿にちよつとだけニヤけてしまう。いい気味だ。

「俺のせいなのか？」

「場所を考えずにこんなところで謝ろうとする方が悪いに決まってるじゃないっ。それに……」

「それに？」

「もう5月何だから、肉まんっていう季節でもないでしょうに」

文句を言ってから半分に千切って口に放り込む。

別にいいだろ。年中、肉まんがうまろうと誰も損しないし。つか、肉まんは何も悪くないだろ。何で肉まんにまで文句つけるんだよ。

後日、俺は正式に野球同好会の一員となった。

6、必要ないが基礎スペック

今更だが、南桜高校には校舎が二つある。そのままのネーミングだが北校舎と南校舎と呼ばれている。どちらも四階建てだ。北校舎には一、二年の教室があり、南校舎には三年の教室と職員室や視聴覚室といった特別教室がある。

ちなみに、俺達一年生の教室は北校舎の一階と二階に分かれている。そして俺の教室は一階なので、今まで二階にいったことはない。多分、そういう人は他にもいると思う。

しかし俺は今、北校舎の階段を上っていた。そこを上り終わるとそこはまだ到達した事のない未知の世界……そんな訳もなく、一階と同じ変わり映えのしない光景がそこにある。知ってはいたが、つまらないものだ。

俺が初めて二階に来るからには、やはり目的がある。

「なんで俺達が行かなきゃいけないんだろうな？」

「いいんじゃないッスか？ 同学年だし僕達の方が話やすいと思うッスよ」

目的。それは勧誘だ。もちろん野球部員の。

「でもなあ。俺、勧誘の仕方なんて分からないぞ」

「大丈夫ッス。向こうは経験者で、全国でも名の知れた選手らしいッス」

「それは、部長からも聞いたけどさ」

「そんな選手が何の事情もなくこんな部活のない高校に来るのかね？」

「それはわからないけど、中学で世代ナンバーワン投手と言われた事もあるらしいし、僕は楽しみッスよ！対戦してみたいッス！」

なんか燃えてるなあ。やっぱスポーツマンってのはこうあるべきなのかね。俺にはそういうものは足りないな。小学生の頃はあったんだっけ？

「そういえば、石江もそこそこ凄かったんだっけ？」

「本当にそこそこッスけどね」

「どのぐらいなんだ？」

「シヨートで四番になるぐらい」

「ふーん」

学校で一番うまいとかそれぐらいの才能なのだろうか。そう言う話を聞くと、益々何故この学校に来たのか聞いてみたくなる。しかし、その前に目的地に着いてしまったようである。

「この教室ッスね」

「名前は何ていったっけ？」

「璃久原一馬りくはら かずまッスよ。それぐらいはちゃんと覚えておくッス」

一年七組、璃久原一馬のいるであろう教室を覗きこむ。

そこにはもう担任の姿はなく、何人かで纏まって他愛のない雑談をしているグループがいくつか。教室内に残っているのは二十人程、早い人はもう部活に行ったり帰ったりしているのだろう。

「で？誰がそうなんだ？」

「え？聞いてないんスカ？」

「顔は聞こえないけど」

「有名人ッスよ！有名人！マジで知らないんスか？」

「うん。だから、誰か聞いてるんだろ」

「あゝ……実は僕も知らないッス」

少しの間をあけてから恥ずかしそうに頭を掻く石江。どうしようもねえな。

「帰るか」

「あー待った！待つッスよ！誰かに聞けば分かるはずッス！」

石江には構わず来た道を戻ろうとするが、

「待てよ」

見知らぬ男子生徒に声を掛けられて足を止めてしまう。

その生徒の身長は俺や石江よりもワンランク高い感じ一八〇センチ以上あるだろう。髪型はネープレスのショートマッシュルームボブ。それに茶髪。目元はしっかりしているが、どちらかというとチャラくて頭のネジが緩そうな印象。プロの選手にもこんな髪型でイケメンハーフな凄い成績の投手がいたような気もする。そこにいる男子生徒は純日本人だが。

「俺に用があるんだろ？」

「その前に誰だよ？」

「有名人だよ。有名人」

目の前の男が自分の親指で自分の胸の辺りトンツと叩いた。

ああ、つまりそう言う事が。俺達が探してる璃久原一馬だと言

たいのだろう。

「自分で言うか？普通」

「仕方ねーじゃん。ちょっと前までは、全国から視察に来たり、TV局が押し掛けて来たりして大変だったんだぜ？」

すごいのはわかるが、得意気に語るあたりがやや癪に障る。

「誰ッスか？知り合いッスか？」

まだ気付いていない様子の石江が頻りに聞いてくる。お前は察し
がいいのか悪いのかよくわからない奴だな。

「璃久原 一馬だろ。俺達の探してる奴」

「正解セーカイ」

その行動に何の意味があるのかは知らないが、人指し指を立てて
クルクル回して見せる。

「おおおおおおお！それなら話は早いッス！是非、野球部に
入ってほしいんす！」

「野球部？悪いな。俺、肘怪我しちゃってもうできねーんだわ」

飛び付こうとする石江を片手で制して、考え込む様子もなく飄々と
そう告げた。つまり、NOということだ。

「おい、一馬ー置いてくぞー！」

廊下の向こうから声がする。数人の男子生徒がたむろしており、
その内の一人が手を振っている。

「あーわかったよ！」

「友達待たせてるんでわりいな」

その生徒に返すように、璃久原は手をヒラヒラさせながら、俺達にさわやかな笑みを残して去っていく。まあ、あれだな。メディアが好みそうなタイプだとは思う。

「完全に器が違うな」

隣で肩を落としている石江を見ながらポツリと漏らす。

「どういう意味ッスか」

「何でもない。やんわり断られたけど、どうするよ？」

気が付くと廊下に残されたのも俺達だけになっていた。いつまでも、ここにいた意味もないだろう。

「今日はもう話するのも無理そうッスね。部屋に行きますか」

「そうするか……」

全く成果も出せないまま、俺の二階デビューは終わった。いや、二階デビューはどうでもいいのだが。

＊

「掛ヶ谷部長！成果はあったッスか！？」

「うーん。とりあえず、考えてはくれる見たい。一先ず保留ってと

ころかな？」

俺達が、璃久原の勧誘をする間に、部長達は幽霊部員に復帰を呼び掛けるという話になっている。

部長達に報告は終わると、今度は俺達があるのままと話した。

「全く、だらしないわね。部員の一人の勧誘も出来ないの？」

何処から持ってきたのか分からない木製の椅子。小学校とかにあった、『気の部屋』辺りにありそうな感じ。その椅子を逆向きにして大股開きで座っていた有紀がまた文句を言ってくる。

「何だよ、お前だって成果なしのくせに」

もちろん、スカートの下にはジャージを穿いているので見えるものは何もない。見えたところで、誰も見ようとはしないだろうが。

「私の成果ならここにいないじゃない」

真っ直ぐに俺を指差した。そういえばそうなるのか。

「そうよ。私は一人連れて来た。だから、今度はあんた達が一人ずつ連れてくるの。そうすればピツタリなんだから」

俺と石江を交互に指差しながら上から目線でそう言っただけ。新入部員にノルマを課すなんて横暴だろうに。何処のねずみ講だよ。

こんな感じで、数日間大した成果も上がらないままただ時間を消費していく。今更言うのもなんだけど、やっぱり野球部創部なんて

諦めた方がいいと思うのだった。

7、バッティングセンター破り

放課後のチャイムが鳴り響く。程なくして帰宅部の生徒達が群れをなして学校を出て行った。そこに交じっていた俺達も運動部を後目に学校を出る。久々のこの感覚。なんと甘美なものか。

しかし、家に帰る訳ではない。そこからはいつもとは真逆の方向。北へ進路を取る。

そこから五分程で土臭い畑道を抜け、駅前を目指す一団と共に自転車走らせる。駅が近付くにつれ背の高いビルが増えて行く。一軒家ばかりが立ち並ぶ家の方角とは全く違う光景だ。とても同じ市内とは思えない。

駅前を通り過ぎると、知らない景色見た事のない場所に足を踏み入れて行く。まあ、隣には石江がいるので帰りの問題はないのだが。そして、高校からここまで続いていた大集団も姿を消した。先に行く集団は四人組のグループだけになった。知らない奴が多いが知ってる奴も一人だけいる。璃久原一馬である。

その日、俺達は璃久原達のグループと遊ぶ約束をしていた。これは部活をサボったわけではなく勧誘活動の一環。事前に報告してある。全く持って問題ないのだ。

「何処まで行くんだ？」

「今日はバッティングセンター。もうちょい先かな」

先に行く集団の一人が答えた。

「これは思ったよりすんなりいきそうッスね」

「そうかもな」

その回答を聞いて、今度は石江とボソボソとそんな話をする。こいつはニヤついてる顔も気持ち悪い。

あの後一週間ぐらい石江は一人で勧誘を続けていたらしい。俺は行っていないので知らないが、今日は向こうから誘ってきたという話で、「入部してくれるかもしれないッス！」と石江は朝から意気込んでいた。

「あ、ブレザーの中で何か光ってないッスか？」

石江に言われて気付いたが、ブレザーの下に着てるシャツの胸ポケットに入れてある携帯のバイブっていた。有紀からの着信だ。

『こらー！何処でサボってんのよ！』

いきなり携帯を投げ捨てたくなるような怒声。

「サボってねえよ！部長に連絡してあるだろ？じゃあな！」

怒鳴り返してから、一方的にぶち切る。だが、それから数分もしない内に再び電話を掛けてきた。

「なんだよ？」

『で、何処にいるのよ？』

「それは部長に聞いてくれって……」

『遊びに行くとして言ってなかったけど？』

それは端折り過ぎですよ、掛ヶ谷部長。

俺はこの後、璃久原勧誘の件と行き先について事細かに説明する羽目になったのだ。信号待ちの間には「彼女からの電話がしつこいな」なんて璃久原の集団からもからかわれてしまう始末だ。彼女じゃないし。それに有紀の声は大きすぎて丸聞こえなんだよ。全く……

＊

駅前を過ぎてから更に十分程。山の麓になろうかと言う辺りにバツティングセンターがある。

昔はゴルフの打ちっ放しだったらしいが、景気が悪く去年あたりからバツティングセンターに変わったらしい。今の時代にバツティングセンターが流行るのかと聞かれたら、首を傾げたくるところだが。

その脇に自転車を止めると景気のいい金属バットの音が中から聞こえてきた。中に入るとまずはゲームセンターのコーナーに向かう予定だとか話をしていると、

「ふ……。来たわね」

金属バットを肩に担ぎ、貸出のヘルメットを律儀に装備したジャージ姿の女が、ゲーセンの入口付近で俺達を待ち受けていた。その女とは……

「璃久原一馬！」

有紀である。しかも上下学校のジャージ姿で。その上何故、中学のものを着てくるんだ。つか、いつの間にここまで来たんだよ。

「私と勝負しなさい！」

肩からバットを降ろすと、バット先をグループの中で一番背の高い大柄の男に向けた。

（何かかっこいいッスよ！ 蓑島先輩ッ！）

（俺は恥ずかしいのだが……）

風が吹き抜ける。もう五月だというのに、今すぐ帰りたくなるような寒さだ。これも単に有紀のせいなのだが。

「あのさ。璃久原は俺なんだけど」

その隣のチャライ男が手を上げる。

「あ、間違えた。ごめんねー」

と平謝りし、最初から仕切り直し。やり直さなくても別にいいと思う。

「バットぐらいは握れるでしょ？ 今すぐ私と勝負しなさい」

「まあ、いいけど」

「折角のバッティングセンター何だし、勝負はもちろんこれよね」

持っていたバットで一回大きくゆったりとしたモーションで素振

りしてみせる。

また言ってるよ、この女。それと、人前でバットを振り回したらいけないんだぞ。小学生でも知ってる常識だ。

「わかったよ。お前が勝ったら部活に入れと言う話だっけ？」

「物わかりがいいわね」

「あれ？勧誘するって気付いたんスか？」

「お前は一週間何の目的で通ってたんだよ」

こちらでくだらない話をしている一方で、本題は進んでいく。

「それじゃあ、俺が勝ったら何がもらえるのかな？」

「私に出来る事なら何でもするわ。一億寄こせとか絶対に無理そんな事以外なら」

「じゃあ、セフレとかどうよ？」

「わかったわ」

軽くうなずく有紀とは対称的に、俺の隣では石江が取り乱していた。

「セフレってあれッスか！？セレブの派生系で。男性とあんな事やこんなことするのが日課な人！毎日、毎晩、いつでも、何処でも、誰とでも。時間も場所も気にせずに……ッ」

「お前は落ち付け」

このままじゃ放送禁止用語どころじゃ済まない気がしたので、頭の天辺に拳骨を一発入れて黙らせておく。

もっとも、石江の事など誰も気にとめていなかったようだが。

「ルールは簡単。あそこに赤い丸が見えるでしょ？そこに当てるとホームランになって景品がもらえるの。ここの景品は一日の無料券一枚で……」

「ホームラン競争かね」

「ゴホンッ……その通り。どっちが先に当てるか勝負よ」

「ふーん、一対一な訳？」

「そのつもりよ。こいつらは役に立たないし」

「ま、いいか。受けて立とう」

「場所・球速は自由。好きなところを選んでいいわ」

一行は有紀を先頭にしてゾロゾロとバッティングセンターの中へ入っていく。何だか完全に置いていかれてしまったようだ。あのジヤージの仲間だと思われるのは恥ずかしい。このまま帰ってもいいのだろうか？

「あんた達も早く来なさい！幸基！あんたが審判やるのよ！」

外でボールとしていると、有紀が戻って来て無駄に怒られてしまう訳だが。

＊

二人が隣り合ったバッターボックスに立っている。右に璃久原、左が有紀。どちらも左利きらしい。面倒臭い奴らだ。

後は俺が合図をしたらスタート。その他のギャラリーは後ろで、勝負が始まる瞬間を待ちわびていた。

「いつでもいいわよ」

「こっちもOK」

互いに準備が出来た事を確認すると、俺は右手を上げて、

「スタート！」

風を裂く音がするぐらいの勢いで右手を降ろす。その直後だった。

パンパカパン！

子ども用のおもちゃにありそうな安っぽいファンファールが店内になり響く。同時に勝ち誇ったように鼻を鳴らして見せるのは有紀だった。コインを入れようとする体制のまま璃久原は啞然とした表情でその先を眺めていた。

どうやら、勝負あったということでもいいのだろうか？

「え、えーと……。勝者、有紀！」

＊

「約束よ」

「なんか面白くないけど、しゃーねーか。わかったよ」

そして、あっさりOKを貰うとその場は解散となる。

隣の石江が「僕の努力って何だったんでスカねー」なんてぼやいていたが、全く無だった訳名じゃないと思うぞ。

「折角だし、もう少し遊んでから帰るかなー」

璃久原達が白けた様子で去って行った後、有紀は再びバッターボックスに戻った。そして、順調にホームランを量産し続けていく。

「有紀って、こんなにうまかったんだな……」

「すげーッスね」

ホームランのファンファーレを鳴らす度に何処からか歓声が上が
る。

「おい、あの中辺中のジャージは間違いないぞ……」

「あれが噂のバッティングセンター破りって奴なのか？」

その数がかさんでくると、有紀の近くで見ているギャラリーから不穏な囁きが聞こえてきた。ちなみに、中辺中とは俺の通っていた中学の名だ。

「二つ名って奴でスカ！？うおおおっ！有紀先輩、かけえッス！マジ最高ッス！！」

それを聞いた石江が興奮気味に叫ぶ。

そこから加速度的にギャラリーが増え始め、ホームランを打った時の歓声はどんどん大きくなっていく。石江も先頭に立って恥ずかしい事を叫ぶのはやめにしようか。

「もう帰ってもいいのかな……」

俺は隅に置かれたベンチで一人ごちていた。

日も落ちる頃、「一枚でいいですか？」と遠慮がちに尋ねる店員を睨みたおして無料券を十数枚貰って戻ってきた。それで、「元は取れた」と自慢気に言われても対応に困るのだが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6148y/>

南桜高校野球部

2011年11月30日02時52分発行